

# 逐語記録に基づく授業分析に関する事例研究

## — 瑞浪市教育研究所に着目して —

A Case Study of Transcript-based Lesson Analysis  
: Focusing on The Mizunami City Education Laboratory (MCEL)

金 津 琢 哉\*

Takuya KANAZU

キーワード：逐語記録，授業分析，教育研究所，教育委員会

Key words: transcript-based lesson analysis, education laboratory, Board of Education

### 要約

授業分析は授業研究の一手法である。岐阜県瑞浪市教育研究所では、重松鷹泰の指導を受けた太田正彦が主導する形で1964年から授業分析が始まった。以来、現在まで営々と教育研究所の主要事業として授業分析が継続されている。教師の協同的分析作業による教育知識の伝承、実践的経験の明文化に向けての努力、そして教育機関誌による共有が繰り返されてきた。

授業分析という教育研究の方法を軸に、それを協同的に実行する組織を作り、研究者の参加と協力も得ながら行ってきた事業だから、これほどまでの長期にわたって継続し、成果の蓄積も確実に成されてきたと言える。瑞浪市教育研究所の授業分析は、若い教師を育て、ベテランの指導力を磨いてきた。そして、「子どもを生かし、授業を大切にできる教育」という大きな物語を紡いできた。この事実は、中小規模自治体の教育委員会が共通して抱える、教師の指導力量の向上と教師相互の協同を促す施策をどう打ち出していくかという問題に対する有益な示唆になると考える。

### Abstract

Transcript-based lesson analysis is a part of lesson study. The Mizunami City Education Laboratory (MCEL) started lesson analysis in 1964, led by Masahiko Ohta who had received guidance from Takayasu Shigematsu. Since then, the Education Laboratory has continuously conducted lesson analysis to date as one of its major projects. In MCEL, teachers worked on lesson analysis cooperatively. In the process, many young teachers were able to learn

---

\* 東海学園大学教育学部教育学科

knowledge about the learning. In MCEL, teachers were going to describe educational experience to face during class. Teachers shared the knowledge gathered in an education bulletin.

Transcript-based lesson analysis has been carried out over an extended period, and has accumulated results. This is because MCEL created an organization, which carried out analyses centering on the method of the education study called the Transcript-based lesson analysis, and it also carried out business while simultaneously getting participation and the cooperation of researchers. MCEL therefore improving the quality of young teachers while improving expert leadership.

When the Board of Education plans business to raise the educational ability of the teacher, this fact will serve as a reference.

## I はじめに

### 1 研究の背景

授業分析は授業研究の一手法である。的場正美(2013)によれば、授業分析の起源は名古屋大学教育学部教育方法研究室の初代教授重松鷹泰を中心とした授業分析の手法を用いた子どもの思考体制の共同研究にある。そして、子どもの思考体制の共同研究を背景として、「授業分析が授業の研究方法として意識され、明確にされたのは1954年」(的場2013)であり、その成果として1961年に重松の著書『授業分析の方法』が公刊された。

山下雅俊(2009)は、大学における授業研究について「大学の研究者が地域の小中学校等との共同研究として「授業研究」に本格的に参画し、それを教育・研究上の不可欠な日常的営みとしたのは、1960年代の初め」と述べ、その時期の動向を5つのグループに整理した。

- A) 名古屋大学グループ(重松鷹泰・上田薫)…綿密な授業分析と子どもの思考体制の分析による研究
- B) 教育社会学グループ(木原健太郎・末吉悌次)…授業における人間関係の発展の分析を中心とする研究
- C) 北海道大学グループ(砂沢喜代治・鈴木秀一)…集団思考による認識過程の深化とわかる授業の実証的検証の研究
- D) 広島大学グループ(吉本均)…学級を学習集団にすることで全員を学習主体にする授業の創造の研究
- E) 神戸大学グループ(杉山明男)…教材の編纂と授業の創造との統一の研究

山下が大学における授業研究の嚆矢として筆頭に挙げているのも重松鷹泰である。山下は、重松を中心とする名古屋大学グループについて「綿密な授業分析」によって特徴付けている。山下が

挙げた5つのグループは、重点のかけ方の違いはあるがいずれも当時の小中学校をフィールドとした実証的な研究をめざしていた。当然、小中学校の教師もそれらの研究に授業提供者として、あるいは共同研究者として関与していくこととなった。

佐藤学(2009)も、日本における授業研究は1960年代までは教師の実践的な研究領域であり、大学におけるアカデミックな授業研究が成立したのは1960年代以降だとしている。その上で1960年代と1970年代の授業研究を推進した三つの力を、教育研究者・民間教育運動・教育行政機関であったと指摘している。さらにそれら三つの推進力は1980年代に構造的な転換を迫られ、いずれも衰退の道をたどり、「今日、学校現場の授業研究を最も強力に支えているのは、教育行政機関が主導して実施している指定研究校制度である」と述べている。

1960年～1980年ごろまでは教育という複雑な事象を解き明かす学問として、あまりにも教育学は不十分であるという自覚が教育の科学化の動機となり、授業研究が教育学の基礎学として位置付き、アカデミックな授業研究が専門学会を中心に盛んに行われるようになった。

その後、アカデミックな教育学の背景となるアメリカの行動科学、旧ソ連の授業分析と教授学などの衰退と脆弱性を補う様々な理論が台頭してきた。現在は「学問研究におけるパラダイム転換、認知心理学や社会的構成主義、学習観や学力観の見直しの影響もあり、さまざまな方法やアプローチが交錯的に存在し」(山下2009)ている状況にあると言える。

そのため、授業研究、特に授業研究の一方法である授業分析は、大学においても教育現場においても、その必要性が相対的に低下することとなった。1960年代に5つあった大学と教育現場との共同の場としての授業研究は、規模を縮小しつつ継続するもの、新しい関心にシフトするものなどに分かれた。地域の研究グループに共同研究者として参加していた教師たちは世代交代により次第に人数を減らし、それに伴い授業研究に対する熱気が次第に失われていった。

## 2 問題の所在

上記のような道を歩まなかった授業研究の実践事例がある。岐阜県瑞浪市教育委員会教育研究所の授業分析である。瑞浪市教育研究所では、重松鷹泰の指導を受けた太田正彦が主導する形で1964年から授業分析が始まった。以来、現在まで営々と教育研究所の主要事業として授業分析が継続されている。

なぜ、50年以上の長期にわたって授業分析が継続されたのか。次々と新しい理論や主張が導入され、対応や適応にあくせくしたり精一杯だったりしているように見える教育界において、瑞浪市教育研究所の歩みは特異とも言える。その歩みに意味があるとすればどのような意味が見出せるのか。これが本論考の問題意識である。

## 3 研究の目的と方法

本研究は、授業研究の一方法である逐語記録に基づく授業分析の再評価を、教師教育の文脈で試みることを目的とする。

そのため、1960年代に大学によるアカデミックな授業研究と連携して地方教育研究所によって主催されるようになった教員研修のうち、1960年代から現在まで逐語記録に基づく授業分析を研究方法とする教員研修を継続している事例として、岐阜県瑞浪市教育研究所の授業分析に着目する。

事例研究は文献調査を主とする。参照した資料は、瑞浪市教育研究所が主体となって編集・発刊してきた以下の文献である。

- ▶ 定期刊行物『教育みずなみ』1955～2015 まで月刊・隔月刊として継続発刊
- ▶ 研究報告『授業の研究』. 第1集～第11集 .1964～1974.
- ▶ 教育研究所二十五周年記念誌 .1981 発刊
- ▶ 教育研究所五十周年記念誌 . 2005 発刊

上記の文献は、教員の研修を目的として編集・発刊されている。そのため、書店に並ぶことがなく、地域の教師や教育関係者に配付されるだけであった。各教師に配付された刊行物は、年月の推移と共に散逸してしまう。まとまった形で保存されているのは、瑞浪市教育研究所のみである。しかし、保存状態は良いとは言えない。特に、1950年代から1960年代にかけての紙の質が悪く、印刷方法も『授業の研究』などは手書きの原稿を青色インクで印刷しており、判読が難しいほど薄くなってしまっている。貴重な資料の保存を考慮し、2015年7月～9月にかけての資料収集は全て写真撮影による電子データによって保存するように細心の注意を払って行った。

上記の文献をもとに、教師教育において逐語記録に基づく授業分析がどのように効果的に働いたかという視点から読み解き、考察していく。

## II 瑞浪市教育研究所の授業分析

### 1 瑞浪市教育委員会及び所管の小中学校について

岐阜県瑞浪市は岐阜県南東部を流れる木曾川、土岐川周辺の小さな盆地を中心部とする。人口は、2015年10月現在で39,018人(瑞浪市HPより。2015年10月13日閲覧)であり、地方の小都市と言える。

瑞浪市は1954年に町村合併により新たに市となった。同時に瑞浪市教育委員会が設置された。発足当初は小学校9校(瑞浪・土岐・稲津・明世・釜戸・陶・日吉第1・日吉第2・大湫)、中学校6校(瑞浪・瑞陵・稲津・釜戸・陶・日吉)だったが、就学児童数の減少のため2015年現在では小学校7校(瑞浪・土岐・稲津・明世・釜戸・陶・日吉)、中学校5校(瑞浪・瑞陵・瑞浪南・釜戸・日吉)に減少している。現在は、中学校の統合計画が進行しており、平成31年には3校(瑞浪・瑞浪南・瑞浪北)になる予定である。

### 2 瑞浪市教育研究所の歩み

#### (1) 授業分析が始まるまで

1955(昭和30)年4月、瑞浪市教育研究所は、瑞浪市教育委員会の事務局として設置された。設置目的は、1968(昭和43)年に整備された瑞浪市教育研究所設置条例第三条に次のように示されている。「本市における教育に関する学理的研究・調査並びに実践的研究を行い、教育関係職員の研究を助長し、その質的向上に資することを目的とする」。

所長は、教育委員会事務局学校教育課長の小川健治が兼任した。所長1名、所員1名のたった2名の研究所である。1960年には所員が1名増員となり、所長1名、主任1名、所員1名となった。1961年から1964年まで、及び1968年から1969年まで所員が1名増員されたがすぐに削減されており、ほとんどの時期を3名の人員で乗り切っている。

1956年には、各校から1名ずつの教諭が選ばれ、研究所に定期的に来るようになった。これを「学校所員会」と称した。当時の研究所専任の所員であった生駒修司の回想によれば「学校からは一名位の先生が(中略)出かけて下さって自由に、気ままに、自分の学校の様子や、教育論や、天下国家論、までも話し合った」(瑞浪市教育研究所1981)という会議だったようだ。生駒がその始まりを「素朴で、ゴソゴソと生まれた」と表現しているように、まさに土着の借り物でない地点からの徒手空拳の出発であった。また、生駒はコアカリキュラム理論が一世を風靡した当時の状況と対照させて、「各学校のやり方、今のことばで言えば教育課程をどんな具合に作ったらいいだろう、それには、何のかざりけも無い子供達の知能や、体力や、生活のしごまを、よくつかんでいきたいなあ」という思いを他の教師と共有していた点を指摘している。

1957年から1960年までの4年間は、学校所員会によって社会科郷土資料の作成・発行と、算数誤答傾向分析とその指導の発表などが行われた。この時期に研究所専任の所員だった土屋千春によれば、学校訪問、各種研究会参加、会議出席等で年間延べ130余回も出張したという多忙の中で、調査研究事業として実態調査や学力テストの実施と分析を行っていた。前任の生駒の「子供達の知能や、体力や、生活のしごま」をつかみたいとする述懐と重なる。この時点での研究所事業は単なるデータ収集と共通教材の作成にとどまっていたと言える。その根底には子供のありのままの姿を見極めようとする教師集団の文化的風土を見出すことができる。

1961年には研究所規定が整えられた。研究所の年間研究組織を委員会制とし、「教育課程委員会」「特活行事委員会」「表簿委員会」「編集委員会」が成立した。1962年には、学校所員会は小学校中学年用に瑞浪市郷土白地図を完成させた。また、小中学校の児童会・生徒会の役員会を開き、学校間の児童生徒の交流を図りながら児童会・生徒会の働きを促している。

## (2) 研究機関誌について — 『授業の研究』と『教育みずなみ』 —

瑞浪市教育研究所の開所と同時に、新しい市としての希望と教員相互の交流をめざして、研究機関誌『教育みずなみ』が発刊された。1955年から1956年にかけて、瑞浪市内各学校で行われた校内研究をまとめた紀要が『教育みずなみ』に掲載されている。

また、1964年には瑞浪市教育研究所の研究報告として『授業の研究』第1集が発刊された。報

告書『授業の研究』はその後、1974年までの11年間にわたり、第11集まで教育研究所から毎年発刊された。研究報告の主な内容は、研究所合宿研を中心に実施された授業の分析に関するものである。1975年以降現在まで、研究機関誌『教育みずなみ』の主要な記事として年間複数回に分割して授業の事実と分析・考察が掲載されるようになった。

### (3) 瑞浪市教育研究所における授業分析の始まり

1962年から1964年まで所長を務めた水野辰雄は、当時の状況を次のように振り返っている。「校長会長であった丹羽康平先生は重松鷹泰先生を招聘して数年間授業に熱中されてきており、分析による研究手法を深められていた。先生の好意で市内の先生方の参加研究者も増え、重松先生のご指導に影響されること、実に大きなものがあった」(瑞浪市教育研究所1981)。丹羽康平は当時瑞浪小学校長であり、校内研究の指導者として重松鷹泰と接点があった。

1964年には、「正しい学級会活動・学級指導を求めて」をテーマとして研究所指定学級を設けた。これは、研究所による学級担任への研究委嘱である。委嘱された学級担任は、テーマを踏まえた計画的な実践と、その省察が求められ、その結果としての力量向上が期待された。1968年3月に出された「研究報告『授業の研究』」によると、「39年度<sup>i</sup>においては従来の授業のあり方を脱皮して、1人1人の教師が、主体的にまた積極的に取組む方法はないか。さらに、従来の研究でいうとテーマを内容的に追うというのではなく、目先きの変わること急いで、ねばりがないという欠陥があったように思うが1つの授業を内容的にじっくり追っていく方法はないか。1人1人の力が凝集されて力の束となるような方法はないかという角度から授業分析をとりあげ、研究方法の理解に一年間をついやした」。よって、1964年は瑞浪市教育研究所における授業分析の準備段階と言える。

瑞浪市で授業分析が本格的に始まったのは1965年である。柘植真秀夫が小学校6年生で算数科の授業を提供し、共同で授業記録を作成した上で、事実をもとに考察した結果を「子どもの思考はどのようにして深まるか」「教師の意図と子どもの動きのズレ」「教師の発言と子供の動き」という3つの項目で報告している。「子どもの思考」について以下に示す小見出しのように詳細な分析がなされている。

- |                   |                        |
|-------------------|------------------------|
| ● 思考発展の契機         | ● U男の考えと解釈             |
| ● S男の考えと解釈        | ● 思考が発展しなかった原因 (U男の場合) |
| ● 思考発展の契機 (S男の場合) | ● 思考発展の契機 (H子の場合)      |

### (4) 授業分析を支えた学校所員会という仕組み

授業分析を実行するのは1956年に始まった学校所員会である。「素朴で、ゴソゴソと生まれた」(瑞浪市教育研究所1981)と形容された学校所員会は、授業分析という理論と方法によって活気づいた。学校所員会は、当時から現在まで毎月1回の頻度で60年近くも継続している。つまり、

1964年以來、学校所員会は半世紀以上にわたり1年も欠かすことなく授業分析を実行し続けてきた。

1964年には、研究所合宿研と称する学校所員の合宿も始まった。夏季休業期間中に瑞浪市内の公民館や公共施設等に学校所員が泊まり込んで研究を行うことを言う。通常は、学校所員会は平日の午後から開催された。学級担任が主な業務なので、学校所員との兼務となると2、3時間の会議が限界である。ところが、授業の事実を元にした分析をチームで行おうとした場合、相当な時間がかかる。そのため、合宿によってまとまった時間を生み出し、集中的に分析を進めることができたのである。研究所合宿研は1964年から2002年まで継続して行われた。

2003年以降は、合宿研は行われていない。当時の研究所主任であった小栗茂は「時代の流れの中で、研究所活動のあり方を点検し、変えざるを得ないことであった。「合宿研」ならではのよさを残していく今である」(瑞浪市教育研究所2005)と述べ、「点検」の結果による心ならずもの廃止であったことを伺わせる。その後、市庁舎での夏季研修会を2日間かけて実施する形となった。

1970年には、嘱託所員制度が設けられる。瑞浪市教育研究所設置条例施行規則によれば、嘱託所員とは「所長が委嘱し専門的分野において研究調査その他所務に協力する」と定められている。人数は「若干名」とあるが、1970年から現在まで瑞浪市内に在職する教師の中から毎年4名が委嘱を受けている。嘱託所員は、担任や校務分掌を担当しながらの業務となる。

嘱託所員は、学校所員と共に授業分析に携わり、授業の事実の記録の仕方や記述の方法を伝え、共に授業の構造を分析する。学校所員の問題意識に対して問い返し、見解を伝えるなどして、検討する価値のある主題に練り上げていく。さらに、学校所員の記述した分析、考察を共に読み直し、論理の精緻化に向けて指導する。杉浦文昭は嘱託所員が学校所員を指導して進める授業分析の過程を説明して次のように述べている。「授業分析の仕事は大変厳しく、所員会において厳しく鍛えられる。授業記録をもとにした事実の解釈、そこからどのような良い授業の要件が見いだされるのか等、鋭く吟味されることになる。当然、授業分析の原稿は、その都度書き直しとなる。何度も何度も書き直すことによって、しだいに論が明確になってくるし、そのことは必然的に学校所員に力をつけることになる」(瑞浪市教育研究所2005)。

つまり、授業分析を教師集団の中からもリードする役割が嘱託所員である。嘱託所員は、学校所員の経験者に委託されるため、授業分析に熟達した教師が次々と育っていく仕組みとなっている。嘱託所員の経験者は、研究所の専任所員や主任、所長となり、瑞浪市の教育界が授業分析を当たり前の風土としている。このため、「授業記録をもとにした校内研究会が、市内のどの学校でも行われ、研究所の授業研究システムが各校に浸透」(瑞浪市教育研究所2005)している。

### 3 瑞浪市教育研究所授業分析の方法

#### (1) 太田正彦の仕事

瑞浪市における授業分析は、当初どのようなものであったか。当時の専任所員であった太田正

彦の仕事を知解く必要がある。瑞浪市立学校教諭であった太田は、1960年に内地留学制度により名古屋大学に学び、重松鷹泰に師事している。1960年は重松の著書『授業分析の方法』が出る前年である。1954年に重松によって意識され明確にされた授業分析が、ある種の熱気を伴って共同研究者によって練られ、熟した時期のことだったと推測される。太田はその後、研究所主任、研究所長、教育長を歴任する過程で瑞浪市の授業分析を理論的に主導した。

例えば、太田は1970年3月26日に発行された「教育みずなみ十六号」誌上で、「授業研究の論点」について専任所員として次のように論じている。瑞浪市における教育研究所活動の課題は、①教師の主体性の確立、②理念的であり具体的、実践的研究を授業に求めること、③研究方法は積み重ねによる連続性、発展性を持つことの3点に要約できる。つまり、教師の主体性を確立するため、授業の事実をもとに理論と実践を融合させる研究を継続するというのである。そのために、「一時間の授業を詳細に記録し、そこにあらわれている教師、子ども、教材の三つがからみあって、はたらいっている事実を集め、それをあるがまゝに見つめ、分析的に解釈を加え、総合的に考察吟味するとき、わたしたちは今までに、いくつかの見落とししていた事実気づく」という方法をとる。太田の主張は先に示した1968年3月の「研究報告『授業の研究』」の記述内容と重なる。執筆者が記されていないが、おそらく太田が書いたものと思われる。

## (2) 瑞浪市教育研究所授業分析の手順

授業を詳細に記録し、分析的に解釈するために、実際にはどのような手順で進めていたか。始まった当初の様子は、1969年3月に出た「研究報告『授業の研究』」の中学校の部会報告によく表れている。「授業の流れをテープにとり(半紙26ページ分)、全体の動き(雰囲気)、問題児(A~F)の観察、板書等手分けをして記録」した資料をもとにしたとある。「授業の現象面だけを表面的になぜ回し、底の浅い分析に終わらないで、生徒が何を考え、何を望んでいるのか、心の深層にまでくい込むような考察ができないものかというもどかしさを感じた」と反省しているように、当時の中学校部会の分析はまだまだ「底の浅い」ものであった。

中学校部会に対し、小学校部会では勝股時夫が小学校4年道徳の授業を提供し、詳細な授業記録を作成、「研究報告『授業の研究』」に掲載している。以下に示すのは、授業分析の記述項目である。事実の記録とそれに対する考察の充実が伺われる。

### ①授業の概括

- (ア) 授業のずれ
- (イ) 分節切り
- (ウ) 授業の印象

### ②ねらいの実現

- (ア) 問題の焦点化

- (イ) 教師の発問
- (ウ) 資料と子どもの実態
- ③子どもの動きから(第3分節)教師の発問の考察
- ④手紙から本時の考察
  - (ア) 静枝さん宛の手紙
  - (イ) 手紙の内容の種類
  - (ウ) ねらいは達成されたか
  - (エ) 児童の実態と資料を足場にした事前調査はよかったか
  - (オ) ノートの価値観調査
  - (カ) 教師の発問
- ⑤ まとめ

授業分析が始まった当初は、重松に学んだ太田正彦の理論的主導にもかかわらず、実行の様態には上記のような差異が見られる。どちらかという小学校部会の方が、太田の意を表した分析に近いのではないか。

『二十五年のあゆみ』に上田舜一が「授業検討のすじ道と方法」と題して授業分析の手順を記している。上田のまとめた手順は、『二十五年のあゆみ』が出された1981年当時のものであり、10年以上もの実践的研究によって鍛えられ、精選され、定着してきた分析方法と言える。

- ①授業者を中心にして事前の検討会をもつ。これにより授業者と学校所員は授業の共有をめざす。
- ②6月に実施される授業を所員を中心に観察する。(音声、画像、映像の記録と共に記述による記録も残す)
- ③授業の逐語記録を作成する。児童や教師の観察記録を逐語記録に加える。授業の流れを数個の分節に分ける。発言相互の関連を矢印でつなぐなどして授業の流れとして図式化する。
- ④授業後に初発の感想を自由に述べ合う。
- ⑤「考えてみたい問題」「探ってみたい問題」をカードに書いて出し合う。
- ⑥出されたカードを分類し、類似問題の鳥づくりをする。
- ⑦類似問題を意識しながら、それぞれの所員が最も追究してみたい問題について授業記録をもとに考察し、記述する。
- ⑧夏季休業期間中の合宿研究会で、記述した考察をもとに相互に検討し合い、さらに追究する値打ちのある問題を抽出し整理する。
- ⑨整理された問題を分担し、それぞれの所員が授業記録をもとに考察し、記述する。
- ⑩その後、6ヶ月かけて共同で推敲を重ね、機関誌「教育みずなみ」に掲載する。

#### 4 瑞浪市教育研究所授業分析の独自性

重松鷹泰をはじめ、名古屋大学グループの研究者である日比裕、田島薫、石川英志等が授業分析の共同研究者として合宿研修会等に迎えられ、研究協議に積極的に参与してきた。そのため、授業分析に用いられている手順には、その時点で研究者から助言があったはずである。しかし、『二十五年のあゆみ』や『五十年のあゆみ』の記述を見ると、当初からの変更は見られない。そこで、瑞浪市教育研究所の授業研究の独自性を明らかにするために、授業分析のあり方を発展させる形で継続研究してきた的場正美・柴田好章が提案する参加型授業研究の分析手順との比較を試みる。

##### (1) 参加型授業研究の分析手順

名古屋大学の地域貢献事業の一環として、2002年度に愛知県東海市教育委員会と連携して「教育実践問題支援プロジェクト」が始まった。それは、参加型授業研究による校内研修を柱としたものであった(的場正美・柴田義章 2013)。

的場は参加型授業研究の手順を11段階で説明した。

第1段階：日常の問題の発掘と共有

第2段階：事前研究(事前調査、教材の選択と分析、授業指導案の作成)

第3段階：授業観察(観察の器具の準備、観察者の役割分担、観察記録)

第4段階：事後調査と資料の収集と保存

第5段階：授業の逐語記録の作成と総合授業記録の作成

第6段階：授業観察と授業逐語記録の読解時に得た視点の整理

第7段階：分節わけと小見出し

第8段階：考察テーマの設定

第9段階：分析テーマにもとづく資料の整理

第10段階：解釈

第11段階：分析結果の報告と蓄積

瑞浪市教育研究所には第1段階が明確に意識された手順として含まれていない。しかし、瑞浪市教育研究所では研究主題が設定され、例えば、1973年には「授業における子どもの成長の要件の検討」を研究主題として授業分析が行われた。以後、次のように研究主題が変遷している。

1974年「子どもの集中する授業」

1975年「子どもが生きる授業」

1976年「子どもが生きる授業—授業における課題のはたらき—」

1977年「子どもが生きる授業—授業における教師の指導—」

授業における子どもの学びの実相に迫り、子どもが成長する要件を明らかにしようとした。その過程で子どもの成長に有効なのは集中する授業であるという発見があった。その後、集中より

も子どもが生きる授業に見方を広げて考えるようになった。そして、子どもが生きる授業を生み出すため、課題、教師の指導等に焦点をしばって探究してきたという過程が上記のように研究主題を連ねることで見えてくる。

瑞浪市教育研究所の研究主題は、研究所の専任所員が原案を作成し、学校所員も交えた協議の末に策定され、運営委員会で承認される。的場の示した案は、一人ひとりの教師の参加によるボトムアップ型の問題発掘が想定されている。単純な比較は難しいが、教育に関する問題の発掘と共有という方向性は似通っていると言える。

第1段階以外は、上田舜一が示した瑞浪市教育研究所の手順とほぼ重なる。的場・柴田の提案は学校を単位とする授業研究会が前提となっており、教育委員会の事業として学校からの代表者によって行われている瑞浪市の例とは状況が違うことを指摘しておかねばならない。

## (2) 参加型授業研究と瑞浪市教育研究所授業分析の異同

柴田の報告によると、参加型授業研究会は形骸化しがちであった研究授業後の授業研究会を改善し、「活発な参加・討議を実現しよう」とする意図により考えられた。だから、その「手順の中には、授業研究会を活性化させるための、仕掛けやツールが埋め込まれて」(的場正美・柴田義章2013)いる。柴田は、参加型授業研究会の原理を問題解決、協同、実証性、改善・成長、討議の5つに整理し、評価基準も作成している。

柴田の示した評価基準は授業実施前5項目、授業実施中5項目、授業実施後6項目、研究全般4項目にわたり、それぞれ5段階に分けて設定されている。ここでは授業実施後6項目(数字は評価基準項目の通番)を以下に示して考察したい。

### 《参加型授業研究会の評価基準「授業実施後」》

- 11) 授業研究協議会において、教員相互の活発な議論がなされたか。
- 12) 授業研究協議会において、特定の児童・生徒(抽出児童・生徒)に関する議論が十分になされたか。
- 13) 授業研究協議会において、今後の課題や指導のあり方が議論されたか。
- 14) 授業研究協議会の記録をとることができたか。
- 15) 研究授業に関する記録や資料は、その後においても十分に活用できるようにしたか。
- 16) 研究授業参観や授業研究協議会を通して、教師としての質の高まりや意識改革が行えたか。

11～14までが授業研究協議会に関する評価項目である。これは、参加型授業研究会が構想された意図を踏まえるならば十分に納得できる事実である。しかし、的場が示した参加型授業研究の手順として示された第8段階：考察テーマの設定、第9段階：分析テーマにもとづく資料の整理、第10段階：解釈は、いずれも上記評価基準では11、12、13にあるように「議論」によって評価さ

れる。

瑞浪市教育研究所の授業分析の手順は、4(1)で考察したように的場の示した参加型授業研究の11段階の手順については齟齬を感じない。しかし、少なくとも参加型授業研究会「授業実施後」の評価基準については、瑞浪市教育研究所の授業分析の在り方と大きな違いが生じている。瑞浪市の授業分析では、考察テーマの設定と分析テーマにもとづく資料の整理、そして解釈の過程が非常に重視され、その過程に十分な時間をかけているからである。

参加型授業研究の対象は学校単位の校内研究会であり、事実に基づく授業研究を開始し、広げていく性質の取り組みである。参加型授業研究が小中学校、そして高等学校・大学等に広がり、根付き、質的な深まりが要求されるようになれば、考察テーマの設定と分析テーマに基づく資料の整理、解釈過程が焦点化されることとなるだろう。

参加型授業研究と瑞浪市教育研究所授業分析は、出自を同じくしており、互いに強い親和性を持つ。その上で、参加型授業研究は、授業分析を教育現場に新しく取り入れるために理論的に最適化されていると考える。一方、瑞浪市教育研究所授業分析は、授業分析創案当初の骨格を残しつつ、現場教師と教育研究所と研究者との長い協同の歴史を経て、事業を継続しやすい形での最適化が実践的に果たされていると言えるのではないか。

### Ⅲ 教師教育の文脈における瑞浪市教育研究所授業分析の意義

佐藤学(1992)は「官僚的な専門化を背景とした「授業研究」の過去三〇年間の歴史は、教育知識の理論的専門家による専有と特権化を助長して、教師の専門的オートノミー(自律性)を衰退させ、教師の成長を「技術的熟達」の領域に限定してきた」と批判した。しかし、同時に「授業の研究は本来的に「実践的研究」であり、その主体は教師である」とし、「授業の研究の目的が授業の改善にあり、その内容が実践的な問題の解決にあること、そして、その成立の基礎が実践的経験の創出と反省を基盤とする実践的研究にある」と述べている。

瑞浪市教育研究所の授業分析は、行政組織の1事業である。だが、そこでは一貫して「子どもを生かし、授業を大切にする教育(1950年に設定されたメインテーマ)」が追究されてきた。佐藤が指摘したような「教育知識の理論的専門家による専有と特権化」ではなく、教師の協同的分析作業による教育知識の伝承、実践的経験の明文化に向けての努力、そして教育機関誌による共有が繰り返されてきた。

杉浦文昭は「教育研究所による人材育成」(瑞浪市教育研究所2005)と題して、瑞浪市教育研究所の主たる設置目的は人材育成にあると述べている。その上で、授業分析を担う学校所員、嘱託所員制度は、人材育成を「意図的・組織的に行うことができる大変貴重な組織である。私自身も含め、この所員会で多くを学んだ者はたくさんいる」とし、「所員会制度を生かし、次代を担う教員を育てよう」とされた先輩諸氏の熱き思いに触れている。授業分析という教育研究の方法を軸に、

それを協同的に実行する組織を作り、研究者の参加と協力も得ながら行ってきた事業だから、これほどまでの長期にわたって継続し、成果の蓄積も確実に成されてきたと言えるのではないか。

さらに、西尾捷郎の指摘も忘れてはならない。西尾は「他所の研究機関は行政機関とは全く別の独立機関として位置付けられているのに対して、うちは両者が一体になって運営されてきた」(瑞浪市教育研究所 2005)とし、専任所員として赴任したときの肩書きが「県教育研究会研修員・専任所員・市指導主事」の3役だったと記している。研究職と行政職とを兼任することが、「一人が三部門或いは二部門からの情報を得て判断し、実践に移せば、自ずからその具体化へ向けての論理性や一貫性・整合性等々が個人内審議されて整い、他者との会合等でなされる内容等がより高次元のもので効率的に運用へと進められた」と有利に働いた様子を回想している。これは、財政力の弱い小都市だからやむを得ない措置ではあった。この事情も授業分析が継続された一因と考えられる。

ここで水野辰雄の言葉を再び引く。水野は重松鷹泰の影響力について言及し、太田正彦の「研究熱」に触れた上で、次のように述べている。「こうした地味ではあるが、透徹した授業観に立っての実践研究であるので真剣そのものの中から出たものである。こうした営みが大勢の力となって瑞浪教育の特色の一面をつくって来たように思う。研究所は教育界の人づくりの場でもある。先生を大事にし、先生に力をつけ、そして組織化し、共同研究に持ち込み、学校を強くしてきたのも研究所である。また、学校所員をパイプ役として研究所と学校の関係を緊密にし、所員と所員との交流によって、学校と学校の協調が図られ全市のレベルアップに好影響を与えてきており瑞浪市各学校の特色をつくって来ている。」(瑞浪市教育研究所 1981)

筆者は、1992年から3年間、瑞浪市立稲津小学校に勤務した。稲津小学校で行われていた「霜田研」は、教育研究所の授業分析を校内研究として実施した例と言える。名古屋大学グループの霜田一敏を年間2回指導者に招いていた。指導案の事前検討を複数回に亘って行い、授業を共同で観察して逐語記録を作成する。その記録を元に個々の職員が分析テーマを設定して事実をもとに考察する。指導案、授業の事実の記録と各教師の考察を編集し、印刷・製本する。当時の稲津小学校では校内研究の方法として個人研究を採用していた。それぞれの教師が個人の研究テーマをもち、互いに切磋琢磨しながら一年間の研究を成し遂げるのである。その成果は、個人研究発表会でプレゼンテーションし、資料や論文などを製本した。当時製本した世界でたった一冊の本は、今でも私の宝物である。

2007年には教育研究所に勤めた。その頃は、授業分析事業に対する風当たりが強かった。教師全員に実施したアンケートには、もっと現場即応の教育課題に取り組むべき、あるいは分析して周知しているはずの原稿を誰も読んでいないという批判が少数ながら必ず寄せられた。学校所員が頻繁に出張することによる自習の増加や負担感を理由に、学校所員の出張回数を削減する要望も校長会から出された。目に見える効果が表れていない、あるいは効果を実感する手立てに乏し

いと言う実態が、そのような批判の背景となっていたように記憶している。教育委員会事務局の内部でも、授業分析を他の事業に転換すべしという声を聞いた。このような批判は、教師の負担感の軽減を考える風潮から生じていた。

校内研究の方法改善を志向するのではなく、教育論調の流行や労働環境の改善要求などに左右される状況は、教育現場が等しく抱える問題状況と言えるのではないか。

瑞浪市教育研究所の授業分析は、若い教師を育て、ベテラン教師の指導力を磨いてきた。そして、「子どもを生かし、授業を大切に教育」という大きな物語を紡いできたと言える。この事実は、中小規模自治体の教育委員会が共通して抱える、教師の指導力量の向上と教師相互の協同を促す施策をどう打ち出していくかという問題に対する有益な示唆になると考える。

教員研修は、逐語記録などの事実をもとにする授業に関する分析と考察を、現場教師、教育委員会そして大学研究者などとの協同で行う形が有効だと言えるのではないだろうか。

## 引用文献

1. 的場正美・柴田義章編．授業研究と授業の創造．溪水社，2013，359p.
2. 瑞浪市教育研究所．教育みずなみ．1955～2015.
3. 瑞浪市教育研究所．研究報告『授業の研究』．第1集～第11集．1964～1974.
4. 瑞浪市教育研究所．教育研究所二十五周年記念誌；二十五年のあゆみ．遠山印刷所，1981，164p.
5. 瑞浪市教育研究所．教育研究所五十周年記念誌；五十年のあゆみ．丸理印刷，2005，180p.
6. 日本教育方法学会．日本の授業研究(上巻)．学文社，2009，173 p.
7. 日本教育方法学会．日本の授業研究(下巻)．学文社，2009，201 p.
8. 佐藤学．教師というアポリア．世織書房，1997，417p.
9. 佐藤学．“改革の動向”．日本の授業研究(上巻)．日本教育方法学会．学文社，2009，p.104-114.
10. 山下雅俊．“大学における授業研究の動向”．日本の授業研究(上巻)．日本教育方法学会．学文社，2009，p.164-172.

---

i 昭和 39(1964)年を表す。